



阿彌陀佛  
安永實錄

十九

~ 13  
3362  
15



18  
3362  
15

二十五  
貸性吉屋  
本卯共衛



阿安永実録傳巻の拾五

目錄

- 一 杉平お休の歌集の
- 一 善休の歌集の
- 一 大休の歌集の
- 一 大休の歌集の

大正十年四月廿九日  
本大寺出版部

阿安永実録傳

阿 安永実録傳巻の十二

松平右依重殿様御事の事

毎依重殿様御事の事

明正の明和九年八月廿一日 松平右依

重殿様の御事には出立

物之を御事百務に御事

この御事には御事

御事には御事



射るも水は霞のてし例より  
~~~~~に汗指りて 卯車風と  
ばうりめと 歌り 殿もあうく見  
させぬまあり 彼依る大石の ともりに  
是は 味のたろく 急をいふ 母の 種  
ア 穂をね 六すぬ 新穂を  
振あげ 鼻つくとあがりし けとに 穂  
急をいふ 付もさうり 早く 叫びる

が 倒れ 死ぬ 殿をさしめを  
院の前 け方 穂とさるく ちのり 下  
お 急をいふ 水は 油の 穂を 母の 穂  
の 急をいふ 穂とさるく ちのり 下  
振舞う 穂とさるく ちのり 下  
此 穂を 穂とさるく ちのり 下  
水 穂とさるく ちのり 下  
の 穂とさるく ちのり 下

ちつと台座の御之村の精人なる  
と湯乃のりきれハ大書の本  
系を山脈合社ありあはるを  
甲子十八ヶ年廻り者成  
陽迷ハ病氣け山の宿り一宿せし  
不精特の事成義り何年一足付  
交者の幸とといふは  
みみありいぬ屋の湯老翁とあり

御身ありらる御り精を  
お勤まつくさるは法施あり  
る人へ殿に先成也るお福六  
よりそありりお福よくも  
あり良死何事御よあまらる  
る事やんあ申し御  
る事さるさるさるさる  
き後らては舟さるいと能く



不登しと懐く懸く祥述し  
述りれ懸くなとく懸く少ね  
油妻子れなとく懸く方より迎ひ  
居つるし居る懸くつる  
音もふべし油通まよると懸く  
根の心は舞をしめん居る懸く  
一玉乃懸く者先懸くと懸く事  
やとく懸く善根成下したく懸く

つるゆる業増伽藍代建立するより  
と國のこころ者の先懸くと懸く事  
りしとく懸く善根印徳を方べし  
我ましとく懸く善根を成すとく懸く  
幾るし油群とく懸く事  
くしとく懸く事他を成すとく懸く  
福を志しとく懸く事成すとく懸く  
先とく懸く事成すとく懸く事



が成す所のつらむとねりつらむ  
なまてしん申たる飲ひかゝつらむと  
運の幸多とてなせしめく云後には  
お休者後かたしく難をいひ利害  
と云々も仰らるゝも大書も今に論方  
水く程も平儀しつらむ白神なり  
海神とて家らおろふ所へ六神とて  
り神とておまればを神とて海神とて  
とて

なまんと申す中りけりおれな  
徳王の面く御小飲ひ大書つと  
摩多勢馬りてせと侍ひを日  
甘く枕りりさ枕ふ大書つと  
と成すち依りり漂向りりり  
お休者後申す格のま山  
ありりりりりりりりりりり  
抱ふとておれりりりりりりり



根と云くちの蔵へ備ふ豪華を  
思ひ思ふ氏何く巨抱んを  
下に付ひの子傳よちちの豪華あり似  
こもたまのくず柴りこより穀生ぬ  
みく精麻と子別く竟之かりけり  
け精とたり此眼之を物とち右の  
とわくも是とえ付て眼のく言たり  
のち不祈のちく打たるく

りもや物ひより器ひなりみり  
鼻づくと高りしち長死せし傳よ  
是天右のち世の口まごし運の  
多如かり去りしに去る年古伝あり  
世を精物の老翁とよとひしそんち右の  
とを運ゆり由る料の種のをとつ  
下し物れそ名氏伝跡大に述と改め  
はを居り巨物との而あ捨るの知りを



了願乃由危難と救ふ事らうこれ  
君愛すなきより救ふ事らうこれ  
唯南産此涉りびりまぬ由抱乃  
義とよりかき事なり業つ  
はく業の有種とん新中く業  
の形相なりはりと東とん業  
お所の業のつて子明智日向  
光秀る者て陸骨抽智高た

ましを取らぬ浪人せし内名利家の  
臣承明智る女智後世と志云はれそ  
名利家へ百抱をよし之物の中  
と取く對面のた之物つて明智  
相相とんて是入る主人し業の  
相ありまし國中成進そ物盛し  
百抱(ざりし)其後光秀の織田信長仁  
しかりし信長とんたて信長

生害させしるは令く主へし業  
の形相遠く事初めし物  
業大し進み形れとてくぐらり  
令く明智老秀ら形れし物と遠  
えは彼ら既し姦妬骨あり業始て  
對面のせりさるく事ある強固と傳  
りれ形れしるは令くちく骨徹く  
事志ましし是を姦妬骨としりしは骨

のちる者つらし業のまじし  
その例多しとてに能ひる物  
彼大し進み面々のちりびと  
至るは唯はるり中絶と進み物  
物とてし後まらるる物とて  
して傳言しるはそいふに

世福是易書とらるる是巻五  
なりしはかとしりしはるる事

なぐ下紙あれこれ智勇たく  
向く武勇の達しそのう相  
覺運れし事と角を争ひ  
実りけ福忌易去りつとく  
野大く進事阿列大を法隠  
病う仕く信行と主物捨田件  
左件と寄封しけ来い沙ん  
孫幸を名とくもく月とくを名

偏悪の老好りし甲左件を  
親せし信悪もくもくを名  
也阿列も信病故くもくを名  
留し之今去依を名り何と  
ら此一事は来りてとさなり  
依より福忌易書殿に信伝を  
大進り能くもくもくを名  
登りての今もくもくを名

いしずはるるしんきん皇土へ

ゆるふと依ちまのほくははははは  
えん年賢才智勇は良おあふ大威  
さすぐを徳の福是是公天醒く  
了此智才は上りたりりるる多樂  
らるるい平老はくす我く老  
とすくこれこそその切はあま  
深意の運係手形相中もんをするる



の思ふ事成ふを信ふ古抱くし事早  
竟我り来くれん頼ふわもるる  
あふ終りし今母りあふと主人  
あふる海を形相有老とたふ大切何  
がそり言海とあふと喜ひい事早  
今く根と懐りいへる海は如く末  
りし事りても同の如く言何り  
そのの方なまなり物り何を信る梅





ん合辨さるるの如く入る事をも切念  
なれ是れ其の良臣也夫れ年々小運の  
後行乃邪也毎吾の一人ありて  
後其の劣の成主君一乃んす事者  
物れ其良臣を捨別せしむ良臣の利  
をよみ年々止り毎後の子事いふと  
一且月やうりりしをも今改め正  
とる也一を其の元は入るは是

と良臣といふ事も今世去佐有る良  
臣も其の良臣の才ありれは其良臣も  
書く傳しむるの良臣にんぞそまら  
さるる也一は其の良臣は其良  
臣も其の良臣の才ありれは其良臣も  
なり其の良臣の才ありれは其良臣も  
大に其の良臣の才ありれは其良臣も  
拾ふる事ありしは其の良臣も

是よりわきまを借界成らんといふ路の  
りいど立此すよーさうゆゑに智界  
島に降りてくれば染る憐れ 獲る内通と  
り林を降りてくればおまじ依地ちと進  
流石のたまり 獲るあゝあゝいさなり官方  
山は物ごとくしりりららとて進中交り成  
るさまをさるるらんや内通との業  
はくぐり思ひなり 獲てけ憐れら山のみ

山のこゝろを精麻の取身なり 細細傳  
ゆゑ一田畑の作りぬとらば農民乃  
うまひ止付ありか年よりなつこの地  
精物ありとらば中へさる事有ん  
り成候と業思ふなり 獲てく山くさる  
目か下のちをさるれば切らさる  
芝山とてなるる精麻をみよ 獲ては  
さるる山くさるるの成り 獲ては





何れかと自給するに里にそのお供  
田畑の作り物とありし農民の換てま  
して年貢に滞りありき自由  
虫物種とりしその農民のうまひを  
殺さんし給ふも之年貢を此山く  
徳生居りて恒産自産とありき  
孰るれ年貢に虫出かりを  
取らるるありき

子更法に彼山此法をさる目より  
下の方物す切しひ其山とありき  
多孰恒産成りて山く出たり  
はりき成弱きす其田畑とあり  
すのとなり農民のうまひ  
君り有るは其山とありき  
年貢が且又山此法を切し  
形を殺し今銀を其山

安堵ひうへりるるはなまひの徳を内通  
事山の徳をまひおまひ染り命せし  
也越山如くくひの義をくもしてまはを  
実好る方さるるなりとせよち依りる  
世よりま出る所云とまひ入るひ位野大  
し進も書追殺す平しと初集の  
可く如今さるる染りぬ秘術の毎  
とゆの終ひいさるるは極の短かり

春風も此もあをのしれす新  
く松野の辛るの好く我もさるる  
強りりるるのとありぬしとまは  
今も根が上は登かかす  
と山と秘斗ぬえのちと進えぬ  
遊ぶすもゆ移なりる角と  
とあひの方有屋しと毎日の初  
善くも急るるは流るのあはも

行のこづめら<sup>ま</sup>迷の<sup>や</sup>奇く<sup>は</sup>是<sup>の</sup>成<sup>り</sup>ゆ<sup>え</sup>に  
る<sup>は</sup>け<sup>ら</sup>さ<sup>か</sup>く<sup>は</sup>信<sup>行</sup>邪<sup>曲</sup>乃<sup>は</sup>者<sup>を</sup>り<sup>し</sup>  
り<sup>し</sup>に<sup>し</sup>く<sup>は</sup>自<sup>ら</sup>再<sup>り</sup>く<sup>は</sup>ま<sup>の</sup>お<sup>の</sup>ま<sup>の</sup>後<sup>に</sup>疑<sup>す</sup>  
く<sup>は</sup>自<sup>ら</sup>美<sup>た</sup>者<sup>も</sup>も<sup>の</sup>ん<sup>ど</sup>流<sup>る</sup>た<sup>れ</sup>  
と<sup>は</sup>完<sup>了</sup>な<sup>る</sup>流<sup>入</sup>し<sup>て</sup>は<sup>り</sup>ま<sup>は</sup>り<sup>ま</sup>な<sup>り</sup>  
え<sup>ん</sup>来<sup>去</sup>依<sup>り</sup>る<sup>る</sup>智<sup>仁</sup>勇<sup>義</sup>信<sup>の</sup>良<sup>の</sup>ぬ<sup>れ</sup>  
形<sup>も</sup>た<sup>は</sup>信<sup>行</sup>の<sup>年</sup>台<sup>に</sup>迷<sup>ひ</sup>や<sup>り</sup>く<sup>は</sup>  
流<sup>る</sup>る<sup>る</sup>り<sup>も</sup>大<sup>く</sup>進<sup>ん</sup>た<sup>る</sup>遊<sup>び</sup>た<sup>る</sup>

り<sup>つ</sup>く<sup>は</sup>事<sup>物</sup>も<sup>も</sup>又<sup>も</sup>是<sup>は</sup>信<sup>行</sup>福<sup>徳</sup>も<sup>も</sup>  
と<sup>は</sup>流<sup>る</sup>る<sup>る</sup>り<sup>も</sup>也<sup>の</sup>作<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>海<sup>先</sup>也<sup>の</sup>流<sup>る</sup>  
信<sup>行</sup>大<sup>く</sup>進<sup>ん</sup>た<sup>る</sup>流<sup>る</sup>る<sup>る</sup>と<sup>は</sup>思<sup>は</sup>る<sup>る</sup>  
我<sup>が</sup>信<sup>行</sup>を<sup>も</sup>我<sup>が</sup>と<sup>は</sup>流<sup>る</sup>る<sup>る</sup>文<sup>を</sup>流<sup>る</sup>  
感<sup>を</sup>も<sup>も</sup>申<sup>す</sup>申<sup>す</sup>申<sup>す</sup>申<sup>す</sup>申<sup>す</sup>申<sup>す</sup>  
と<sup>は</sup>近<sup>く</sup>の<sup>時</sup>を<sup>も</sup>秘<sup>し</sup>身<sup>の</sup>妙<sup>の</sup>術<sup>の</sup>力<sup>を</sup>也<sup>の</sup>  
と<sup>は</sup>流<sup>る</sup>る<sup>る</sup>り<sup>も</sup>我<sup>が</sup>つ<sup>ら</sup>り<sup>も</sup>只<sup>し</sup>  
り<sup>つ</sup>く<sup>は</sup>流<sup>る</sup>る<sup>る</sup>り<sup>も</sup>志<sup>を</sup>也<sup>の</sup>流<sup>る</sup>



るにすむけに書みて遊ばせん事ゆゑ  
なりけりをかくのちもあつては  
頼山陽とてゆふんと懸正切掛ひのさ  
ひさの作やうのそまき老氏の強  
美氏相つては海老がりの世は  
入を我老冠ゆらふもさゆし  
法本氏書るもひふと上志さう  
すうとくは山にのちもなる

大に進む事斗ぬ御はあつては  
りさの書に情をばくはとすて眉  
成るその海島つをぬも情あふる  
早にそを棄ける任を任る事  
あつては書に推すれとてり  
孫行形欲の御と取したる山く切  
るの候とは今もれ海を海略  
りりあつて海の上を登るとる

ら何れ又舊職に此強後を招かざる  
るを利のさうれ 半無強とて  
誠者有る中せは余く樂が保平也  
右山 汝知るひこそその持保  
成く多し社会根とむきなりそん  
為なり 上ら若くそそそそ 立身出世  
んものとは保中なりそそそ 尚書八山  
をくして 貧家の者ありひ 道よん

若葉成り 薪自他を垣より 物  
山くちら自今もはれと物に切そひ  
芝山とるすうとはを多家の志成そ  
よ己の者も 葉新に強弱少なるす  
山くちら自今もはれと物に切そひ  
字をま母余の物に考強もに困窮  
かれくすそ 若くはたそそ 慈ある也  
也 おまそ 粘麻の強作物とありす

方との大民百姓をそん憐れむとて  
其時より中居とて一守子民に  
庶を介多敵乃防ぎ以て  
徳の事と方へてとて又農民とも  
そ村々の言割そ人吏として替り  
くふ由成初ら事始むとたて一年  
中務麻の由成去りて言割り  
阿てと強固とらふ事の方へて

務麻の苦方へては之強し相まて  
由去りかりの事は今く由務麻を  
阿てと又農民は作の防ぎの爲  
つゆもあて守務麻を強固と  
初て言割とらふ事の方へて  
平よりて君民始むとて  
心ありみ政場乃指揮軍配と  
たて山種りて方へて

ちがりし響歸りし里はあまの山好し欠  
 上波のふすなをさし居れまへこそ人畜  
 いま是地坊さるこそも 枯朽を言ひ止  
 了のふるをさしあへず是全くを平  
 礼を言れども是れも一物も言へ山  
 く波切さるる何のまへあへん却て下  
 万民の難後國若くは好むに似たりこ  
 くみく大に進る可流難非の候

悪くさるるへく候必を候用  
 然るもかち御事と見り上を所  
 何とありし由候分取進致し  
 かけを候さるる事色かき理非明白  
 凍云しをりて候 智恵此福星  
 書り教訓之ち候方との候く是候  
 此の経耳ををたてりしあや島と伊り  
 智略感さるる候 程ありし方我ら



